

西トップ遺跡の調査と修復

1 第14次調査

南祠堂の西側、基壇西端に接するように、南北1.0m、東西2.0mの調査区を設置した（Mトレンチ）。調査の目的は、南祠堂の基礎地業の有無および地山（自然堆積層）の確認である。並行して実施した南祠堂の解体工事にもない、その基壇土の状況を確認すると、中成基壇土には砂岩チップを混入した土、下成基壇土には砂が用いられていたことがわかったので、それらの状況とあわせ、南祠堂の建造過程を理解する上で、基礎の状況をあきらかにすることは重要である。調査期間は2012年6月4日～14日。

地表下およそ2.5mまで、あまりしまりの良くない褐色粘質土が堆積していることが確認された。それらは大きく6層に分けることができたが、いずれの層にも散発的に陶磁器や土器が含まれており、出土遺物の状況からはそこに大きな時期差を認めることはできない。地表下2.5m（標高およそ20m）以下では、青灰色の粘土による堆積が確認され、当初は自然堆積層（地山）であると推定したものの、掘り進めると若干の土器片（無釉および灰釉）の出土をみた。以前に西トップ遺跡で実施したボーリング調査の結果¹⁾によると、この地点の自然堆積層は概ね灰黄褐色～褐色の粘土質砂が主体であるが、標高20m付近に薄い粘性土の堆積が確認されていることから、今

回検出した自然堆積層はこれに相当すると考えられる。この層の位置づけについて現時点では確定できないものの、その直上の整地土と想定される層とは様相が異なるため、西トップ遺跡の寺域全体で大規模な整地がおこなわれた段階（14世紀頃）以前の堆積である可能性が高い。出土した土器片については、年代を決定できる特徴を持ち合わせていなかったものの、14世紀頃の改修以前の、前身寺院の時期（ラテライト製の祠堂が単立していた時期）に属する遺物である可能性がある。この段階の様相は現段階では不明なため、中央祠堂の解体にともなう前身寺院期の詳細な解明を待つこととした。

今回の南祠堂の調査においても、版築のような基礎を強化する土木工事がおこなわれた証拠は認められず、第7次調査で確認した中央祠堂西北隅の基礎の状況と大差なかったことがわかった。すなわち、前述の青灰色粘土層より上のおよそ2.5mの堆積は、西トップ遺跡を砂岩製建物に改修した14世紀頃に盛土によって整地をおこなった際の一連のものである可能性が高い。

この整地土は前述のように版築などの地盤強化がほどこされておらず、建物の重量を支持するには脆弱すぎる印象があるので、当初は西トップ遺跡の構造の不安定化の要因であると考えたこともあった。しかし地覆石のレベル差の計測値を参照する限り²⁾、顕著な不同沈下は認められないことから、少なくとも基礎は十分な支持力を有しており、不安定化の要因はむしろ基壇土の問題である可能性が高いと評価されるだろう。

（石村 智・石橋茂登）

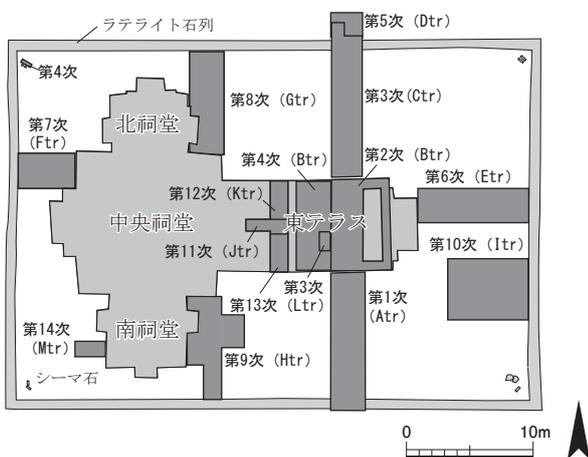


図8 西トップ遺跡のトレンチ配置図 1:600

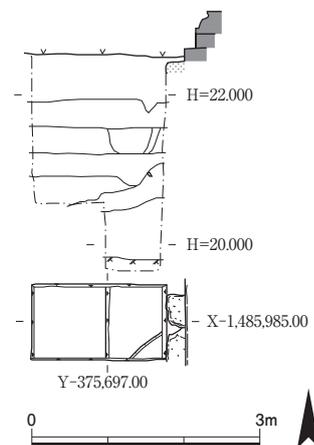


図9 第14次調査遺構平面図・北壁断面図 1:100

2 修復に至る経緯

奈良文化財研究所では1993年からカンボジアとの間でアンコール文化遺産保護に関する研究協力事業を推進してきた。2001年からはアンコール・トム内西トップ遺跡を対象とする、新たな共同研究を開始した。しかし事業途次の2008年、中央祠堂東面の石材40数個が落下するに至り、修復を含めた新たな対応方針が求められることになった。

その後、関係各方面との調整を経て、2011年12月14日に新しい覚書を交わし、2012年3月8日、現地にて修復開始式典をおこない、修復活動を開始した。

修復に関しては、解体・仮組場を南と西に設けて、番付を施し解体した各祠堂の石材をいったん仮組場に並べ、解体終了後、順次仮組にかかることとした。仮組場の面積の関係から、各祠堂ごとに解体・仮組・再構築を順次進め、単一祠堂の再構築終了後、次の祠堂の解体に着手する方針をとった。修復作業の円滑な進行を考え、まず中央祠堂と比べ小型で、北祠堂に比べ当初の状態を良好にとどめる南祠堂から解体を着手することにした。その後、北祠堂・中央祠堂の順で解体を進める計画を考えた。

3月8日の修復開始式典を受けて、南祠堂の解体を翌9日から開始した。南祠堂は躯体部・上成基壇・下成基壇の3部で構成され、3月13日までに躯体部の解体を終わり、上成基壇の解体に着手した。上成基壇中央には石材がなく、黒色砂質土に砂岩チップを混入した土が充填されていた。また各段について解体後平面実測等をおこなった関係で解体の進行が遅れ、下成基壇上面の写真撮影を7月17日に終了した。その後、7月21日から24日に下成基壇土の土質試験をおこなった後、下成基壇上面を構成する敷石N18の解体を進めた。

N18の解体は最終的に8月14日に終了し写真撮影をおこなった。この段階で、中央祠堂の南階段が存在することがあきらかとなり、下成基壇内部の基壇土の発掘と、南階段の精査が必要となった。8月14日から16日まで下成基壇基壇土北西1/4の発掘をおこない、南階段の遺存状況を確認した。9月7日から9日にかけて基壇土北半分の発掘をおこない、南階段の全容をあきらかにした。12月に入り11日から14日まで南階段と下成基壇裏込石等の3D測量をおこなった(図13)。

3 南祠堂におけるフランスの修復

南祠堂に関しては、1920年代にフランスがクリーニングをおこなったときの施工と思われるコンクリート製サポートが5カ所、石材間のモルタル充填が4カ所に認められた。

東面横支柱1組(図10:1,2) 南祠堂においては東面と北面の残りが良い。この状態で全体が南に傾いたことにより、東面開口部の北側構成材が桁材の残っていた北側開口部の重量を受けることになった。この重量を東側開口部構成材全体で受けるために、東面開口部に横方向の梁(2)をかけ、その上に三角形の扉枠支持材(1)を造り出していた。東面開口部内側には東面扉枠上部桁材の倒壊防止のためのサポート2本があった。東側の1本は祠堂内部の石組沈下のために外れており、本来の機能を果たしていない。長さ75cm、12cm四角、西側の1本は現状で東面扉枠上部の桁材を支えていた。長さ103cm、幅17cm、幅14cm。

東面積石間の充填(図10:A,B,C,D) 東面開口部構成材が傾いた事によって、積み石間に隙間が生じ一部にモルタルを充填している(図10:A,B)。開口部構成材南側では、傾いた事による荷重を受け石材が割れた部分が2カ所あり、同じ大きさにモルタルを充填している(図10:C,D)。



図10 南祠堂東面におけるフランスの修復

4 上成基壇の仮組

上成基壇の石材 (N16: 図11) 北階段部は長さ92cm、幅52cm、厚さ19cmの石を標準とする長方形の石材4材を使う。南階段部は同大の3材と小型の石材で構成する。東西階段部は平面L字型でモールディングを有する石材2材と、長方形の石材2～3材を使い構成する。

階段部には転用石材を集中的に使用している。多くがセマ石の転用で、長さの長短2型式が存在する。東階段部には横方向123、縦方向94、78、北階段部には横方向119、西階段部には横方向84、南階段部には横方向95。北階段部の119は頂部が一部破損しておりセマ石と思われるが確認できない。

東西の一番内側の石材71と83は角柱状の石材で他と比べて厚い。北階段部104には線刻記号が見られ、別にラテライトが1石用いられている。

上成基壇の石材 (N17: 図12) 東西階段部は長さ83cm、幅47cm、厚さ19cmの標準的な直方体石材を横2材、その両側に長さ93cm、幅56cm、厚さ20cmの縦2材を加えた構成となる。南階段部は横2材と西側縦1材、東側はさらに横2材で構成している。北側は中央祠堂南階段が張り出しているため、すべて横材で構成されている。この北階段部の構成部材の中に、ラテライト3材が使用されている。

南側105は長さ100cm、幅49cm、厚さ22cmのひときわ大

きな石材が使用されている。表面が幾分赤く、紅色砂岩に近似する。一方の小口面は角を取って整形しており、何らかの未成品を転用したと考えられる。同じく89も長さ70cm、幅39cm、厚さ22cmの他と異なる規格の石材で転用材と推定される。

一部には線形を有し、基壇葛石の転用と思われる石材が使用されている。こうした転用はN18でも見ることができる。

上面にはN16の石材位置を示す線刻が各コーナー部分に刻まれる(図12)。東北と西北では線刻が二重になる部分があり、N16の位置を修正したものと考えられる。

上成基壇の石材 (N18) 上成基壇最下段であり、下成基壇の最上段の敷石を構成するN18は、上成基壇構成石材と異なり、敷石としてはやや扁平な厚さ12cm前後の石材が主体を占める。しかし厚さの一定しない石材や、扁平な石材を縦に使用して細長い隙間を埋めるような例も存在する。145は厚さ25cm、148は厚さ20cm。南側の階段部に続く121は、厚さ20cm、長さ84cm、幅33cmの石材を使用している。また146は幅16cm、幅38cm、長さ54cmで、一般的な厚さの敷石を縦に使用している。いずれも転用材の可能性はある。

これまで見られた上に載る石材の位置を示す線刻は部分的にしか存在しない。西階段部西南部には、上部に載る石材の位置を示す線刻が一部に残る。それ以外の3方

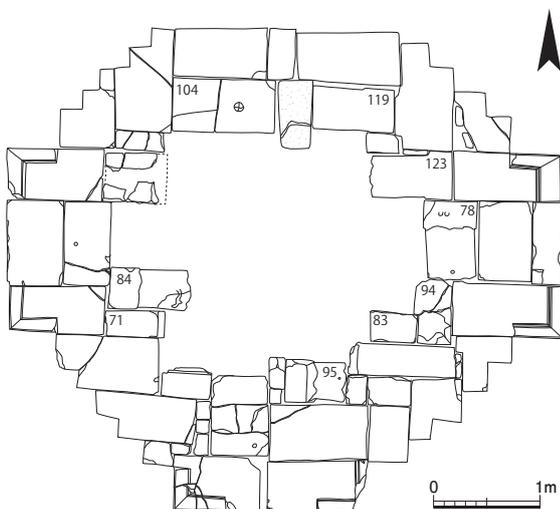


図11 上成基壇N16平面図

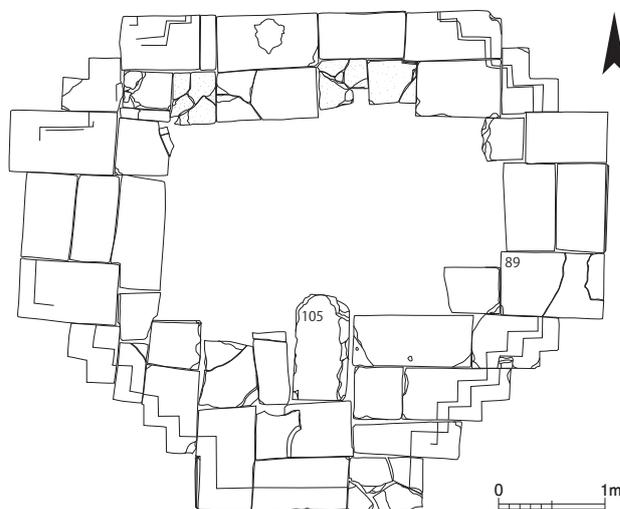


図12 上成基壇N17平面図

向階段部の2石には、長方形の線刻を施した部分が認められる。

103と147には記号と見られる線刻がある。また104と105は基壇葛石の転用と思われるモールディングの一部が見られる。98には上面に穿孔がある。他に見られない特徴であり転用材であろう。

N18では石材の破損は比較的少ないが、一部隙間をふさいだ細長い石材に2～3分割した例が見られる。

南階段（巻頭図版1） 今回の南祠堂解体によってあきらかとなった事実のうち、もっとも大きな成果が、中央祠堂南階段の発見である。報告書をまとめた時点では「第2段階は、ラテライト製基壇のまわりに現在見られる砂岩製の基壇外装を張りつけ、砂岩製の祠堂を設置する時期である。その際、南祠堂下成基壇も同時期に作られていることが、下成基壇の線形と石材の納まりから確認された。」³⁾と考えていた。ところが今回の南階段の発見によって、少なくとも中央祠堂は東西と南に階段を持つ構成で一旦建立・完成した後に、南側に同じ線形を持つ基壇外装石材をめぐらし、南祠堂を建立したことがあきらかになった。

南階段の構造は、一直線に並ぶ中央祠堂中成基壇南階段と基本的には同じである。下成基壇の延石は2段で構成され、旧地表面の凹凸にあわせて下段の延石を敷き並べ、上段の延石の厚さを調整することによって地覆石の水平を調整している。階段は延石の延長から数えて6段で、長手方向に長さ約95cmの材と、長さ約35cmから40cmの2材で構成される。袖石部や中央祠堂下成基壇外装は、これまで観察されていた構成と全く同様で、延石の上に地覆石、羽目石、葛石で構成され、葛石の上に南祠堂上成基壇最下層のN18敷石に続く石材を置く。

南祠堂基壇内の発掘調査により、基壇内より少量の土



図13 南祠堂基壇内北立面図（中央祠堂南階段）

器・陶器片を発見するとともに、青銅製の鈴2点を発見した。1点は蓮の蕾を形取った形状（図14）で、他の1点は球状の鈴（図15）である。いずれも南祠堂基壇内赤褐色粗砂層から完形で出土しており、鎮壇としての意味を持つものと推定される。2012年度末現在で、南祠堂基壇内を外側地表面より約20cm下げているが、いまだ基壇土を主に構成する赤褐色粗砂層が続いており、南祠堂については何らかの掘込地業がおこなわれている可能性を考えている。ただし先述した第14次調査の結果で、南祠堂下成基壇延石外側には掘り込みが認められないところから、基壇外装砂岩石材の直下から掘り込みをおこなっていると考えられる。また基壇内掘込地業の底に近いところから機能は不明ながら砂岩の石列が検出された。

（杉山 洋・佐藤由似）

註

- 1) JASA地盤環境班調査チーム・原口強・福田光治・北村篤実・井出善明『アンコール遺跡西トップ地盤調査報告書』2012。
- 2) 奈良文化財研究所『西トップ遺跡調査報告』2011、31頁。
- 3) 奈良文化財研究所『西トップ遺跡調査報告』2011、165頁。



図14 南祠堂基壇土出土青銅鈴（その1）



図15 南祠堂基壇土出土青銅鈴（その2）